

動物遺存体の調査(7)

埋蔵文化財センター

本年度に依頼を受けて行った動物遺存体の調査には、滋賀県栗津湖底遺跡の現地調査および動物遺存体の分析、兵庫県但馬国府推定地出土の動物遺存体の分析などがある。

1. 滋賀県大塚栗津湖底遺跡の調査

（財）滋賀県文化財保護協会の依頼を受け、栗津湖底遺跡の発掘調査に参加した。遺跡は縄文早期の包含層と縄文中期初頭の貝塚および植物層が主体であった。遺跡は現湖水面より約2mほどの湖底に広がり、貝塚部はセタシジミを主体とした貝層と、トチ、ドングリ類、クルミなどを主体とする植物層、砂礫層などが互層となって形成されている。この遺跡は琵琶湖の水位の上昇によって水没したため、陸上の遺跡では残りにくい木器や食料となった堅果類などの有機遺物が豊富に残されていた。貝塚の内部および、下層には堅果類を主体とした純植物層が発達し、主体はトチとドングリ類であった。近畿地方でトチのアク抜き技術が普及したのは、縄文後期以降であったといわれていたが、この発掘により、中期初頭には高度なトチのアク抜き技術が普及していた事を明らかにできた。動物遺存体は、イノシシ、ニホンジカ、ニホンザル、タヌキ、イヌ、ノウサギなどの哺乳類と、スッポン、そして、コイ、ナマズ類、ギギ類などの魚類があった。現在、動植物食の比重と生業の季節性を明かにすることを目標に整理分析中である。（伊庭功ほか、「栗津湖底遺跡の調査」『日本考古学協会第57回総会研究発表要旨』21-24）

2. 但馬国府推定地の調査

兵庫県教育委員会の依頼で、日高町但馬国府推定地出土動物遺存体の分析を行った。平安時代から中世にかけての溝から出土したのは、マダイ、イヌ、ウシ、ウマ、ヒトで、骨はすべて散乱状態であった。人骨以外は、出土部位が偏ることと解体痕などから、皮や肉を取った後に投棄されたことは明白である。人骨も完全なものはない。その関節部近くにはイヌの噛み跡が多く残る。絵巻物や『往生要集』に見られるように、死後、埋葬もされず放置され、犬や鳥にかじられながら、こうした流路に打ち捨てられていた人のいたことも、古代から中世にかけて

の社会の一面を語っているのだろう。

松井章1992（予定）「但馬国府推定地出土の動物遺存体」『但馬国府推定地発掘調査報告』兵庫県教委（松井章）

写真は大塚栗津湖底遺跡（南東から）